

パナソニック・イズム

ism

モノづくりスピリッツ
発見マガジン

アーカイブ
Archives

SHARE

▶ コンテンツ一覧

▶ このサイトについて

ism トップ > 赤星たみこの【エコロ発見記】 ～生ごみ処理機「リサイクラー」～

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。



赤星たみこの 【エコロ発見記】

～生ごみ処理機「リサイクラー」～

乾燥式の生ごみ処理機なら、生ごみが資源に?!
自称・ゴミ漫画家の赤星たみこが、
生ごみ有効活用に向けた
松下のエコロに出会いました。



プロローグ

[松下のエコロに会いに行く。](#)

第1章

[リサイクルの輪を
作っている人の夢。](#)

第2章

[いざ、闘争の舞台裏へ!](#)

第3章

[今度こそ!
エコロな「リサイクラー」へ](#)

第4章

[処理物の行方は...??](#)

第5章

[松下のエコロは熱かった!](#)

[スタッフ一覧へ](#) / [プロローグ「松下のエコロに会いに行く。」へ](#)

このコンテンツ、あなたの評価は? おもしろい ふつう おもしろくない

ism トップ

[コンテンツ一覧](#) | [このサイトについて](#)

ism トップ > 赤星たみこの【エコロ発見記】 ～生ごみ処理機「リサイクラー」～ > プロローグ 松下のエコロに会いに行く。

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

●プロローグ

赤星たみこ、
松下のエコロに会いに行く。



赤星たみこの
【エコロ発見記】
生ごみ処理機「リサイクラー」

こんにちは、漫画家の赤星たみこです。
漫画家は生活がとても不規則で、毎朝のごみ出しがままならないことから始めたごみ減量が、いまや私の楽しい趣味になってきました。不必要なものを断ったり、ごみが少ない商品を買ったり、リサイクルに出せるものは全部出してみたり、いろんなことしているうちに、私の家のごみは少しずつ減ってきました。

家庭ごみの中で一番やっかいなのが生ごみ。生ごみがあると臭いので、毎日ごみを出してしまいたくなりますよね。でも、家庭ごみの中から生ごみが消えると、他のごみは臭くないし乾いているので、そんなに毎日出さなくてもよくなるんです。うちでは生ごみは庭のコンポストに入れて処理しています。土をたっぷり入れてよくかき混ぜると、悪臭や虫の発生もなく、快適に生ごみが処理できます。たい肥を作っているわけではなく、ごみ減量が目的です。おかげでうちはこの十年、生ごみは全部土に戻しているのです。市のごみ収集に生ごみを出したことは一度もありません。すごいでしょ？ 土の力はありがたいですねえ。

そんな中、折にふれて耳にしてきた、機械で生ごみを処理するという商品。うーん、土でできるものをわざわざ電気を使って処理するの？ もったいなくない？ それってホントにエコなの？ 私は機械での生ごみ処理には賛成できませんでした。しかし、うちは田舎で、庭に土がたっぷりあるからこそ、生ごみを簡単に処理できるのです。都会のマンション住まいの方にはできないことですよ。都会限定で機械の処理でもいいかも…。私の考えも少しずつ変わってきました。生ごみ処理機にはバイオ式と乾燥式の二つがあります。名前だけ聞くと、バイオ式の方がエコだと思える人が多いと思います。しかし、実は乾燥式の方が処理物を二次使用しやすく、臭いもなく、使い勝手の面から見ても優れているのではないかとその思いが通じたのか、なんとイズム編集部から、生ごみ処理機の取材にきてくれないか、という依頼がありました。その生ごみ処理機は、ふふふ、乾燥式なんですよ！ しかも、私が知らなかった、処理物の二次使用の実例もたくさんあるとのこと。処理物のリサイクルはたい肥にするだけじゃないんですね。家畜の飼料にもなって、リサイクルがうまく回っているんですって!! いいじゃないですか～。これは行って見て聞けば！

松下電器・八日市工場へ、眠い目をこすりつつ朝4時起きで行って来ましたよ！



トップ プロローグ 第1章 第2章 第3章 第4章 第5章

次へ

トップへ | 第1章 リサイクルの輪を作っている人の夢へ

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

第1章 リサイクルの輪を 作っている人の夢



乾燥式の生ごみ処理機でできた処理物は、ほんとに二次使用がしやすい？ 一体どんなところでリサイクルされてるの？ たくさんのハテナとともに、私、赤星がやってきたのは、滋賀県八日市市にある松下電器・エコクリーンライフ事業部。

生ごみも、乾燥させたらさらさらに！
変身っぷりにびっくり。

ここでお話を聞かせてくれたのは、今、生ごみ処理機の普及に努めている営業の吉田さん。笑顔がとっても優しい、にこやかな語り口の方です。「これが、『リサイクラー』で処理したものです」。吉田さんが差し出したのは、透明のビニール袋に入った茶色のさらさらの粉…。早速においをかいでみると、これがふりかけみたいなの、なかなか香ばしいイイにおい！ 魚が入っているのかな？ 玉子の殻らしき白いものも混ざってます。へえ！なるほど、これなら保存もしやすそう。

持ち運びや郵送もできちゃうんですね？「130℃の温風を生ごみに吹きつけて、生ごみに含まれる水分を乾燥させて処理していますから、除菌効果もあり、衛生的です。長期間保存しても菌が増えることもなく、有機肥料の素材としてだけでなく飼料の原料としても大変使いやすいものです」と、吉田さんが教えてくれました。

「でも、この処理物、たくさんきたらどうするんでしょう。保存できるって言うても…」私の疑問に吉田さん、にこやかに答えてくれました。「この処理物を使って、今、いろいろなところでリサイクルの輪ができていますよ」。おお！それはすごいっ！生ごみ処理って、処理したあとのブツをどう使うかがミソなんですよ。どんなところでどんな風に使われているのか教えてくださいっ！

厄介な外来魚が、高品質の肥料に！
生ごみが再利用される現場。

「この生ごみ処理物は、家庭菜園での活用はもちろん、いろいろなところで役立ってきていますよ。例えば、琵琶湖ではここ8～9年の間に、ブルーギルやブラックバスなどの外来魚がすく繁殖して問題になっています。もともと琵琶湖に生息する鮎やモロコシの稚魚を食べてしまい、それらの魚が激減しているんですね。今、漁に出ても獲れるのは9割が外来魚という状態です。そんな外来魚を、業務用の『リサイクラー』を使って魚粉にして、最高に栄養価の高い肥料を作っているんですよ」。

できた魚粉を利用している農園で作る赤かぶは、実がひきしまつて濃物にしても甘味たっぷりで、すごく人気があるんですよ。食べてみると、確かに自然な甘みと歯ごたえがあって、体にとってもよさそう！



エコクリーンライフ事業部・営業の吉田 栄治さん。生ごみの再利用方法を日々研究されています。



生ごみ処理機「リサイクラー」の最新機種。コンパクトで、キッチンに置いて使えます。

▶ 最新の製品情報はこちら



たくさん獲れた外来魚は、業務用リサイクラーで魚粉に。



魚粉はさらさらで香ばしいニオイ。



魚粉を利用した肥料で、甘みのある赤かぶが育っています。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第1章のつぎ)

肥料だけじゃない！その汎用性に脱帽。

さらに、肥料だけでなく、飼料としても使えるのが、乾燥式の処理物のすごいところ。バイオ式だと、飼料に使うのは難しいんですよね。滋賀県のある洋菓子工場では出るバームクーヘンの切れ端のごみを処理し、豚の飼料原料としてうまく循環させている事例も聞くことができました。

「豚にとってもバームクーヘンの処理粉はごちそうで、大変喜んで食べます。このエサで育った豚は、脂身もあり、まるで霜降りのような肉質になるんですって。あるレストランではやわらかくて臭みもないと、たちまちに評判になったんですよ」。しかも、以前は「産業廃棄物」扱いで、捨てるのに年間10万円もかかっていたそうですが、今では飼料原料として販売できるようになった、というのです。経済的にもうれしい変化じゃないですか〜。

かつては、吉田さん自ら畜産試験場に生ごみ処理物を持ち込まれ、豚や鶏の飼料としても役に立つか実験したこともあるのだそうです。その熱い思いが実を結び、今ではそれが立派に循環しているというのはいすごい！ ととても感心してしまいました。



「リサイクラー」を多くの人にすすめてくれた吉田さん。笑顔の裏には自信が見えました。

生ごみ処理法で大学の先生と大激論！？

でも、乾燥式の良さを、すぐわかってくれない人もいたのでは？

「ある大学の先生がね、リサイクルするにはバイオ式だっておっしゃったんですよ。その先生は、生ごみの再利用の業界では有名なすごい方です。でも乾燥処理物は、本当にリサイクルに適しているの、私ね、何度も何度も先生とケンカをしてしまいました」。

ええっ？ ケンカ？ この穏やかな吉田さんが？ ちょっとびっくりしましたが、「ケンカ」とは、「口論」のこと。熱意のこもった説得、ということみたい。その先生も吉田さんの熱のこもった説得で乾燥式を理解され、今では吉田さんにとっても仲良しのいい先生なんですって。

「だってね、乾燥式の処理物は臭くないし、保存もきく。もともと生ごみは、人が口に入れるはずだったものです。それを乾燥させただけですからね。こんなにいい資源ないですよ。だから先生を説得するために、先生の研究室とご自宅で、『リサイクラー』を実験使用していただきました！」。吉田さん、結構大胆ですね〜。

「処理物に未来を感じるからこそ、おすすめしているんです」

その方は生ごみのリサイクルに関しては権威の先生ですから、いろんなメーカーから生ごみ処理機の試用を依頼されていて、その全てを試していたところ、ご自宅に使われていた奥さまが、「リサイクラー」しか使わなくなった、とのこと。

その先生が指揮をとられて、現在東京の世田谷区では、家庭や店舗からの生ごみを処理して、大学の「リサイクル研究センター」で肥料に加工して再利用する、ということも実現しました。

「使っていただいた人には乾燥式の良さがわかるんですなあ。他にも『リサイクラー』を実際試していただいた方がいますが、その方が気に入っていただけるのはもちろん、どんどん周囲の方に広める、ということが、よく起こるんですよ」。吉田さんのにこやかな笑顔と行動力と、熱い熱い情熱で、使ってみよう、という気になった人も多いのでは！？

戻る

2/3

次へ

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第1章のつぎ)

もし生ごみが全部、資源になったら・・・
「現在、日本で出ている生ごみの量は年間約2000万トン※1。『リサイクラー』で処理しているのはごくわずかです。もしも、これがすべて資源としてリサイクルされたら、どんなに素晴らしいことか・・・！」と、熱く語る吉田さん。

※1 厚生労働省資料（平成8年度）に基づき農林水産省にて推計。

そうなんです。毎日何気なく口にする食糧のほとんどが輸入に頼っている日本。食糧の自給率は40%※2程度なんです。わざわざ外国から輸入までしてそんなにたくさんゴミを出しているんですね。なんてもったいない！ 今こそ、生ごみをリサイクルして循環型社会に変えていかなくてはなりません。

※2 食糧自給率（カロリーベース）。平成13年度農林水産省「我が国の食糧自給率レポート」より
「自治体で回収して焼却する方法もありますが、私は自分で出したごみは自分で処理し、自己完結するのが、環境のためにはいいのでは、と思っているんです。そうすることで子どもにも食糧の大切さや、リサイクルの大切さが伝えられますよね」。全国を東奔西走してその信念を説き続け、多くのリサイクルの輪をコツコツと作ってこられた吉田さん。頭が下がります。

ブログでも書きましたが、赤星家では生ごみは庭のコンポストに入れて処理し、生ごみを土に戻しています。うちは田舎で庭に土がたっぷりあるからそれができるけれど、都会のマンションではそういうわけにはいきませんよね。せっき生ごみを自分たちで処理するのなら、簡単に処理物が二次使用できるのが、よりいいに決まっていますよね。これから増えていく生ごみリサイクルの輪に、大きな夢が広がります！

次回は、乾燥式生ごみ処理機
開発の舞台裏に潜入！

処理物のリサイクルしやすさという点でも、この乾燥式はやっぱりいいな～と、すっかり気に入ってしまった私。でも、初めからこんなに扱いやすい生ごみ処理機だったのではないらしいのです。むむ？ 昔の生ごみ処理機って、どんなものだったんでしょう。またまた興味があふらんできたところで、開発の舞台裏のお話を聞くことができました。

そこで次回からは、この「リサイクラー」が生まれるまでの涙あり、笑いありの感動秘話をたっぷりとお伝えします。



赤星たみこの
【エコロ発見記】
生ごみ処理機「リサイクラー」



吉田さんが全国を歩くのは、商品を売るというより、リサイクルの輪をつなげるということなんです。



いろんな処理方法があるけれど、減量だけではなくリサイクルできる方がいい！吉田さんと、意気投合してしまいました。



第2章 いざ、開発の舞台裏へ！



乾燥式生ごみ処理機「リサイクラー」の処理物の活躍っぷりに、私、赤星は、すっかり感動！ やっぱり、応援するなら乾燥式だ、と思っていたのは正解だったなあ！

「今でこそ扱いやすい『リサイクラー』ですが、完成にたどりつくまでには、ながーい道のりがあったんですよ」と、吉田さん。

そう、そこが気になっていました！ いつ頃から研究されていたのかしらん？ 開発当初の生ごみ処理機ってどんなだったのかしらん？

ぜひ、「リサイクラー」の開発秘話を聞かせてください！



(エコクリーンライフ事業部の吉田さんと生産ラインの前で)

生ごみを家庭で安全に処理したい！
夢をのせて開発スタート。

まずお会いしたのは、技術者の林田さん。優しいイメージで落ち着いた物腰の紳士です。

いつごろ開発がスタートしたのですか？

「1973年ごろですね。松下には『人のいるところには、ごみがある。その全てを掃除する』という理念があり、それに基づいてキッチンのごみも何とかせねば、と生ごみ処理機の開発が始まったんです」。

え！ 今から30年も前に、斬新な発想ですね…！

「松下として初めに考えたのが『真空乾燥式』というものです。生ごみを真空状態にしなが熱を加えて乾燥する方法ですが、4年で断念しました」。

あら、乾燥する方法だと今の「リサイクラー」に近いのでは？

「装置は大きいわ、コストも高いわ…。私たちは家庭用として安心、安全な上、清潔、小型で価格も安いというのを目指していましたから」。

なるほど、当初から家庭用を念頭に置いていたんだ～！ しかし最初からうまくは行かぬものですね…。

「その後取り組んだのが『クラッシャー式』です。これは、生ごみを細かく粉碎する方法で、その際に出る水分を下水道に流してしまうもの。残った生ごみが悪臭を放ち、これも断念…。次第に、涙なしには語れない様相を呈してきました！

「クラッシャー式」の次に「バイオ式」も考えてみたのですが、それにもちょっと問題が…。

「菌を使って生ごみを分解する方式ですが、内部で生かしている菌の管理が大変なんです。誤って異物を入れると菌が死んでしまったり、虫がわいてしまったり…」。

わかります！ 「バイオ式」、実は赤星家でも使ってみた事があるんですが、入れてはいけないと書いてある汁物をうっかり入れたら、ものすごいにおいや虫で大変でした。

菌って生き物の管理は、たしかに難しい…。

「我々はあくまで、家の中で安心して安全に使えて、メンテナンスも不要なもの、という信念を持っていたので、『バイオ式』も断念しました」。

よく考えると、生ごみというのは家庭や季節によって中身が多様多様になるもの。万全の「安心・安全」を突き詰めるところに、林田さんを含む開発技術者たちの心意気を感じました。松下の考える家庭用生ごみ処理機は、そういうポリシーの下、始まったんですね。



開発スタッフだった林田 幸雄さん。苦勞された当時を、懐かしそうに話してくださいました。



1979年ごろ取り組まれた「クラッシャー式」。シンク下に設置するしくみ。残った生ごみがすごい臭いを放ったそうです。



乾燥式にたどりつくまでの紆余曲折を、丁寧に教えていただきました。う～ん、おもしろい！



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第2章のつづき)

いよいよ誕生、「乾燥式」！

家庭で使えて、においも気にならなくて、安心・安全って不可能？ 開発スタートから15年余り、次の手がなくなっていたときに、一筋の光が差し込みます。それは、松下の中央研究所というところで開発した「電子焼却機」にありました。当時、責任者として研究されていた鈴木さんに話を聞いてみると…

「うちで研究したのは、生ごみを燃やして炭化する『電子焼却機』です。まず生ごみを乾燥させます。ここまではいいんだけど、さらに800℃という高温で炭化させる、という行程があって、そのせいで装置が大きくなってコストも高く、それは家庭用というより、業務用として販売されました。

この開発中に、乾燥でとめれば構造が簡単になることに気が付いて、生ごみを乾燥して処理する方法、そして脱臭する方法について研究を続けておられたとのこと！ プラボー！！ 見えてきましたよ！

この、鈴木さんたちの「乾燥状態でストップしたらいい」というアイデアがエコクリーンライフ事業部に伝わり、林田さんたちのクラッシャー式などの粉碎し、攪拌する技術と融合して、「リサイクラー」の原型になったんです！ ここに「乾燥式」が誕生！

その直後の1992年、家庭用生ごみ処理機として形が見え始めた頃、この研究が当時の社長の目に留まり、なんと、社長プロジェクトという重点開発商品に決定されました。やっと追い風が吹いてきた…と思った矢先、のんびりしていられない事態に！

社長プロジェクトに決定されたため、下された社長からの指令！ それは…

「1年後に商品化して発売せよ！！」

1年？！ まだ乾燥式と決まったばかりの時期に、この局面をどう乗り越えたんでしょう？

生ごみ処理最強の敵・「におい」を消せ！

社長の指令により発売時期だけが突然決まったものの、「乾燥式」には解決すべき課題が山積み。処理時のにおい、処理のスピード、商品自体の大きさ、価格。開発当初から絶対譲れない信念だった「家庭で使って安心・安全」というものとは、まだ程遠かったのです。

その中でも特に苦戦を強いられたのが、「におい」でした。

「生ごみを粉碎して乾燥するとき、生ごみ自体の水分が蒸発します。そのにおいが強烈なんです」と、林田さん。生ごみ汁の蒸気…、すごそうです…。

「そのころ実験を繰り返していましたが、本当においがかさって、実験中に処理機のフタをぱっと開けると、1秒もしないうちに向こうの方から“くさっ！”っていう声か飛んでくるんです。においがどうしてそんな速度で伝わるのか、いまだにわからないんですけど」と、林田さん。

それって、例えると一体どんなにおいなんですか？

「うーん、そう聞かれても答えようがないですね。そのにおいたるや、いまだかつて人類がかいだことのないにおいですからね(笑)。その強烈なおいのおかげで、私たちスタッフも1年くらい鼻がきかなくなってしまいました」。

人類がかいだことのないにおい?! どんなにおいなんだろう…。試したいような、怖いような。笑顔で話す林田さんですが、当時、まだ若き青年だった頃に(今もステキですけど!)、工場に勤務する若い女性社員から「臭い! いいかげんにして!」と言われ続けた毎日は、さぞかし辛かったでしょうね…。

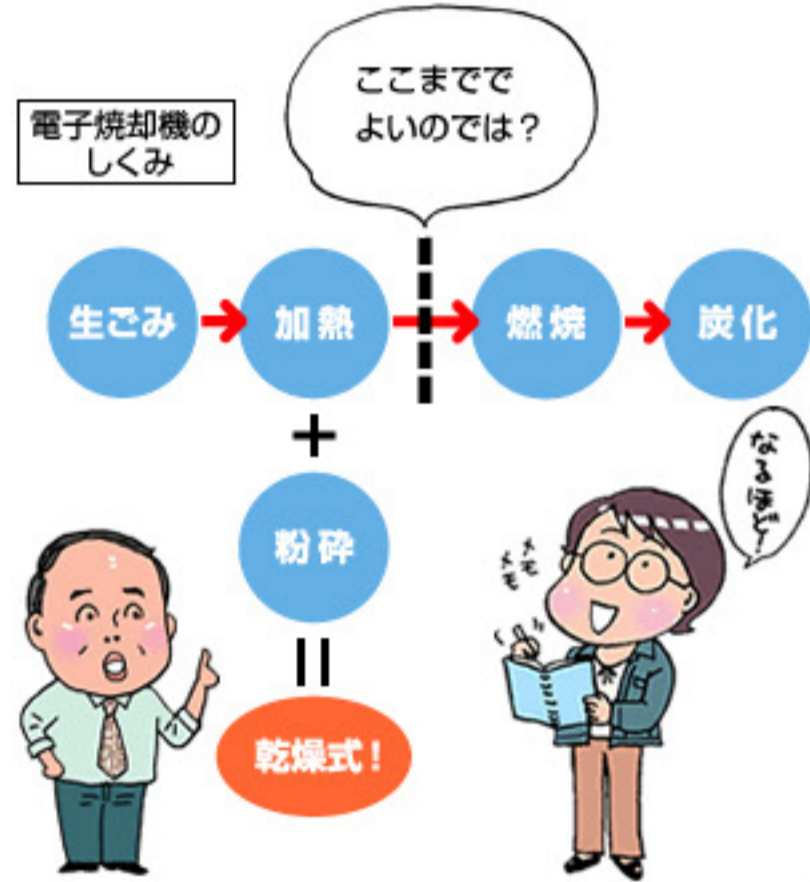
とにかく処理中の臭い蒸気は漏らさないよう密閉構造にして、においを消すための脱臭触媒をいくつもつけて…できる手は尽くされたそうですが、このにおいはなかなか消えてくれません。

「密閉してるのに、どこからともなくにおってくるんです。考えられる隙間を埋めても臭い。どうやら、ネジとネジ穴のわずかな隙間からでも漏れるみたいなんです! もうガックリですよ。でも脱臭触媒を増やすと商品自体が大きくなってしまって、キッチンに置けなくなる。だからといって、においも放っておけない、というジレンマですね」と林田さん。

試行錯誤を繰り返す中、発売日はどんどん迫ってきます。果たして間に合うのか?!



「乾燥式」産みの親のひとり、中央研究所の鈴木次郎さん。



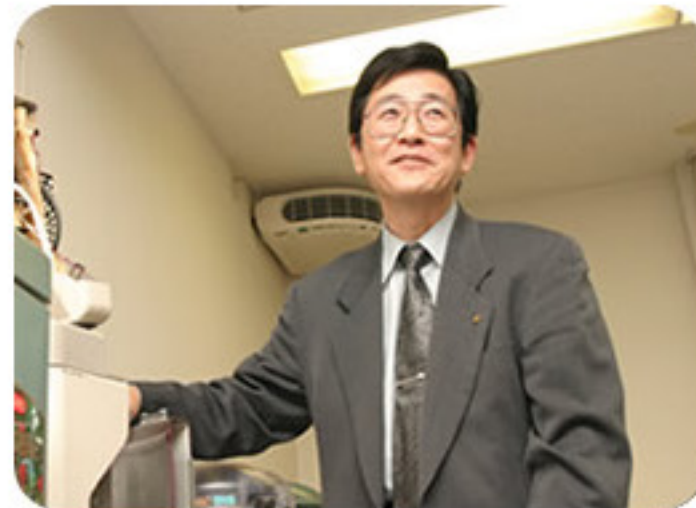
いったいどんなにおいだったんでしょうね!? 興味津々です〜。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

（第2章のつづ）

時間がない！ 事業部総出の開発大作戦！
「発売を目前に、私を含む10名が、在籍状態で開発に没頭しました。実験しては課題を見つけ、また実験の繰り返しでした」と、当時の苦労も、今は懐かしそうに話す林田さん。
「まさに昼夜のない生活でしたよ。でもいくら実験しても課題だらけ。課題の数はもうそれこそ、1000個くらいあったんじゃないかな」。
はあ〜。聞いているだけでため息が出そう。
「乾燥式の生ごみ処理機はまったく新しいものでした。世に無いものですから、どこまで改善すれば完成なのか、判断基準がないんです。課題を見つけてはそれを解決する。最後は技術者である自分との戦いになっていました」。
おお！ みなさんの熱い闘志みなぎる様子が目に浮かびます！
さらに、あらゆる場合を想定して、何度も実験が行われました。ある日はオレンジの皮ばかりを処理してみたり、またある日は缶詰を缶ごと入れてみたり。油を処理してみる、というちょっと怖い実験もあったそうです。買った人がどんな使い方をするかわからないものだけに、入念なチェックがあったんですね。
そして、発売まであと2カ月という時。
「他の研究をしていた者も残業時間は自分の研究を止め、生ごみ処理機の研究に加わってくれました。当時の林技術部長（現、松下ホームアプライアンス社社長）が、『このままでは間に合わへん！ 全員で取り組めい！』と命令したんです。そんな命令は後にも先にも聞いたことがない。あれは抜群の采配だったな〜」。
そうして、1000個もの課題に全員で取り組んだそうです。気の遠くなるような作業でも、自分たちの納得のいくものを作る！という信念が、たくさんの技術者を突き動かしたんですね〜！ 林田さんも、どこか誇らしげです。開発に打ち込む姿には本当に感動しました。林田さん、かっこいいです！



たくさんの苦労も乗り越えられたからこそこの笑顔です。

待望の1号機完成！でも、待っていたのは…

ついに「リサイクラー」の1号機は誕生しました。開発着手から20年、1993年11月のこと。前評判も高く、市場初の生ごみ処理機「リサイクラー」は話題の商品に。すぐ2万台が売れたんですって！ 発売前は「本当に買ってくれる人はいるのか？」と、内部にも疑問を持つ人も多かったそうですが、案外行けるかも?! 苦労して育てたわが子を世に送り出し、ほっと一息…しかし！

林田さんたちを待っていたのは…クレームの嵐!!
「においの元、蒸気は本体から漏れないよう最善を尽くしました。蒸気を冷却し液体に戻し、それをタンクに溜める。溜まった排水は捨てればにおいは残らない。きっと満足してもらえと思ったんです」。そうですよね〜。そこが一番苦労したんですもんね〜。では何が原因??

「このタンクに溜まる水がとにかく臭かったんです。実験室で感じる部分では、最大限の改善をしたつもりでした。でも、家庭で使うと我慢できるレベルでなかったようですよ」。
またしても、「におい」が壁！ せっかく発売できたのに…!
それからは、返品商品の山に囲まれながら、また実験、実験の日々に逆戻り。でもその実験の日々が、今の「リサイクラー」を作ったんですね！ がんばれ！この解決策、さらに汗と涙の物語になっています。次回は、「ある部品」をめぐるドラマティックな展開が待っていますよ！



ついに完成した「リサイクラー」第1号。13万8千円。ちょっと高価なものでした。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

第3章 今度こそ！ エコロな「リサイクラー」へ



汗と涙の研究開発の末ようやく完成した生ごみ処理機「リサイクラー」。「タンクの水が臭い！」というクレームの嵐に見舞われた「リサイクラー」を救ったのは、「ある部品」だったらしいのです。

この「ある部品」って何だろう?? 教えてください、林田さん!

2号機開発の切り札、「ある部品」とは

「『ある部品』っていうのは、これなんです!」と、林田さんが見せてくださったのは、らせん形の金属のモノ。いったいなんだ???

「これは、生ごみのおいを分解して消してくれる『脱臭触媒』です。2号機の開発にあたり、これを劇的に改良したんですよ。にこやかに語る林田さんの目がキラリと光りました。

「あのクレームの後でしょ、2号機の開発が許されたってこと自体、すごいことですよ。もうクレームがつくような商品では許されません。徹底的に改善した完璧なものでないかためだったんです。まさに、背水の陣でしたよ」と、林田さん。

においを何とか退治したい!という熱が冷めなかった、ということですよ! それで、どう改良したんです?

「処理中に出る臭い蒸気をこの脱臭触媒に通して脱臭するんですが、空気がうまく流れていくように、こんな形にしました。ほら、以前はこんな形で、空気との接触面積を増やすため蜂の巣状にしていたんですよ。でもその穴の中で空気が留まっちゃうから、それを解決するため、らせん形を考えたんです。この間隔が微妙でね〜。広いとにおいがあるまま一気に出てしまうので、何度も試してこんならせん形に行き着いたんです」。

へえ〜。ずいぶん大きな変化ですね! これと同じ脱臭する部品だなんて。

素材は、以前のセラミック製のものより高価だけど、性能が格段にいい「白金パラジウム」を採用されたんだそうです。林田さんたちは、それをうまくらせん形の金属に塗り付ける技術と、空気がうまく流れるらせんの形を編み出したとのこと! また、これが「リサイクラー」内部で回転して脱臭するっていうからオドロキです! それによって、空気がうまくらせん形の中を通っていくようになって、脱臭性能がグーンと上がりました。

「前はこんなにいい脱臭触媒がなかったから、できるだけ蒸気を留めようとしていました。だからこもってしまい、強烈におったんですね。これによって、もっとスピーディに処理しても十分脱臭できるようになったんです!」と、林田さんも得意げです。タンクがなくなったら、捨てに行く手間もなくなるしいいですよね。すごい変化!

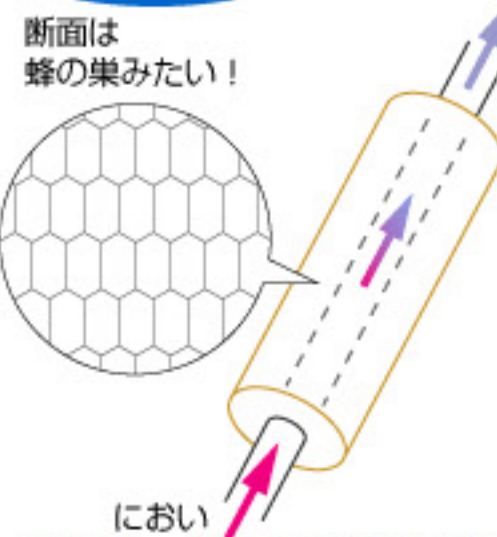
「実は脱臭触媒をなんとか改良せねば、と考えるに至るまでに、私たちにはあるヒラメキがあったんですよ」と、林田さん。

え、そうなんですか?? そのヒラメキとは?



林田さんが見せてくれた「ある部品」。いったい何でしょう?

改良前



断面は蜂の巣みたい!

におい

セラミック製で、たくさんの穴がある構造だったそうです。空気との接触面積は多いけど、空気が留まりやすかったんですね。

改良後



脱臭された空気

におい

ステンレスのらせん形の部品に、白金パラジウムを塗ったもの。らせんの中を空気が通るので、においを逃さず脱臭できるんですって。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第3章のつぎ)

フライパンが、
「リサイクラー」を変えた？

「生ごみっていっても、もとは私たちの口に入る食材の一部でしょう。それなのに、なぜ生ごみになるとにおうんだろう、と考えてみたんですね」と、林田さん。

「ほら、調理の場合、熱を加えますよね。『リサイクラー』の場合も熱を加えているのに、においが違う。調理のときのいいにおいのヒミツはなんだ？！と考えたんですよ。それで、試しにごみとして捨てる部分を、調理するようにフライパンで炒めてみた。すると、やっぱりちゃんといいにおいがしたんです。むむむ。考えてみれば当たり前の話なんですけど、うっかり見逃してしまうところですよ！

「生ごみ処理機で熱を加えるのと、フライパンで熱を加えるのと、どう違うかわかりますか？ 調理するときのいいにおいのヒミツとは？！」

うーん、なんでしょう。温度かしら？ それとも…？

「そのヒミツは空気だったんです！ たっぷり酸素があるから、調理する時にはいいにおいになるんだ、と気づきました」。

な、なるほど！ 私、目からウロコが30枚ほど落ちましたよ！！

「今まではとにかく処理中のにおいを封じ込めることだけを考えていたんですよ。脱臭性能が低かったから、本体の外に放出することができなかったんです。気づいたときは、これだ！という感じでした」と、林田さん。

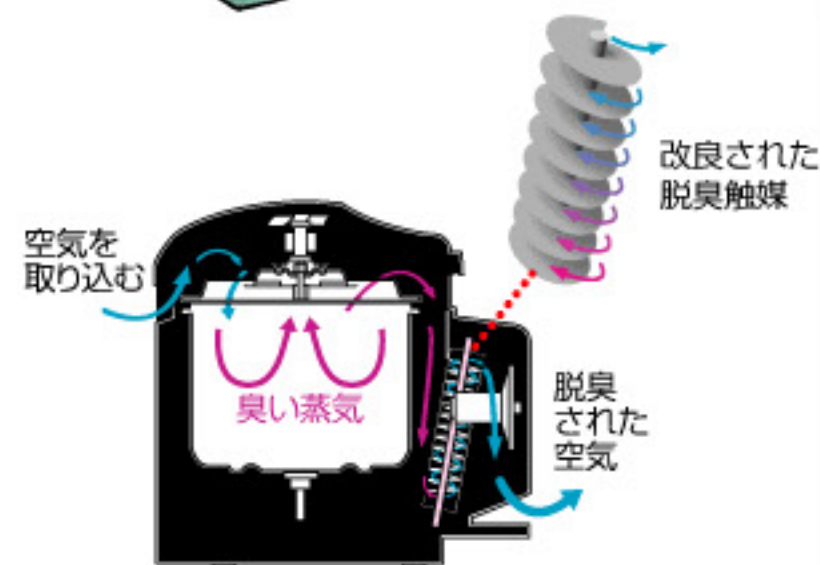
生ごみ処理には多少の悪臭はつき物、と思っていると気づかないことかも。どうしてごみがにおうのか、という原点に戻ったからこそ見つかった新発想ですね～！！

このヒラメキを受け、1号機の発想から、処理機の中に空気を強制的に送り込み、空気がたっぷりある中でごみを乾燥させるように変更。生ごみ処理機の中を空気が通っていく仕組みになったから、出ていく空気のおいを消す必要があった。それで、脱臭触媒の改良をした、というわけなんです。

こうして、「空気」の新発想と、それによって生まれた「高性能の脱臭触媒」で、においが気にならない生ごみ処理機「リサイクラー」はようやく完成！ においの壁を、見事乗り越えたんです！ よかった～！

「僕たちが開発したのは、ここまで。あとは、後輩達ががんばってくれたんです」。

林田さんはどことなくホッとした表情で話してくださいました。この2号機から、パツパツとクレームは取まったとのこと。林田さんたち開発技術者の熱意の勝利です！



臭い蒸気を逃がさないよう密閉構造にしていた1号機から、2号機は、空気を取り込んで脱臭しながら外に出す、というしくみになったんです。



これが「リサイクラー」2号機。タンクがなくなって、ずいぶんコンパクトになりました。

戻る

2/3

次へ

次へ

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

● (第3章のつづき)

● どうやって広めよう？ 普及への取り組み

さて、「リサイクラー」が完成したあとは、いかに広めるか、が問題です。1号機のクレームによって大変な逆風が…。経営企画室長をされていた芦田さんが、当時の取り組みを聞かせてくださいました。

「普通、ごみは自治体が回収して、それぞれに焼却や埋め立てなどをして処理しているってご存知ですか？ まだ開発途中の頃、自治体が行うごみ処理の実態を調査したんですよ。全国各地の自治体に連絡をとって」。

どんな結果でした？ 自治体によってさまざまでしょうね～。

「わかったのは、自治体の多くが焼却炉の建設費が高いことに頭を悩ませてたってことと、家庭用生ごみ処理機に興味があったことです。やっぱりごみは増えていく一方だし、環境にも良くない。各家庭で生ごみを処理することは、自治体にとってもメリットがあるなあ、と感じました」と、芦田さん。

こうした実態調査を踏まえて、芦田さんたちが自治体に提案したのは、「助成金制度」。生ごみ処理機を買うのに、いくらか自治体から補助してもらえる、という制度です。

「小さい自治体ほど興味が強くて、アポなしでも話を聞いてもらえました。ただ説明してもどんなメリットがあるかピンと来ないから、ある方程式を作ったんですわ。ごみの焼却コストと人口の値を入れれば、助成金を出したときどれだけのメリットがあるかがわかる式です。そうしたらね、たいていの市町村はメリットが出るってわかったんです！ こういう自治体とのやりとりは、なかなかおもしろかったな～」という芦田さんは、とても懐かしそうです。

大蔵省、通産省、東京都庁…と大きなところから、小さな市町村にいたるまで、助成金を出して欲しいと交渉に回られたそうです。その数、なんと300以上！ そうして、多くが助成金の拠出を決定したというから、すごい成果ですね！

赤星としては、ごみを減らすことは自治体の財政にいいだけでなく、環境面でもとてもいい効果があると思っています。各家庭で電気を使って生ごみを処理するのと、焼却炉で全部燃やすのでは、どちらが環境にいいかという議論がよくおきますが、各家庭で生ごみを処理すれば、ごみ収集車の運転回数が減るし、焼却炉の負担が減ります。長い目で見ると、これは大変な省エネになっているのではないかと私は思っています。

「自治体の反応はいろいろだったけど、交渉しているうちに、これは社会的に価値のある取り組みだと実感できましたね。やっぱり家庭用生ごみ処理機、なんとしてでも広めたいって、いい商品ができたから、余計にね」。

本当にこの生ごみ処理機は、開発に携わった人みんなの夢を乗せているんだな～と感じました。多くの人の手によって、広まっていったんですね。

● エコロへのこだわり、ここにあり

「2号機の画期的な改良のあとも、現在の『リサイクラー』になるまで、色々な改良をしてるんですよ」と教えてくださったのが、商品企画を担当されている澤さんです。

「発売から、今年で10年が経ちました。実際にご家庭で使っていただいたお客さまの声も集まってきて、本当に使いやすいものに成長しつつあります。例えば電気代が安いとか、処理のスピードが速いとか。家庭で気軽に使える商品であるべき、というのが私たちの考える『リサイクラー』ですからね」。

澤さんの言葉に、皆さんうなずいています。今日ここに集まってくださった方たちが、本当にこの商品をお愛しているという心が伝わってきます。

家庭の生ごみを減らしたい、という思いから始まった皆さんの夢には、たくさんの苦労がありました。でもとことん「エコロ＝気軽なエコロジー」を追求することにこだわって、これだけの熱意で乗り越えた…。開発スタッフの長い長い道のりを振り返ってみて、赤星、しばし感慨にふけてしまいました。

● 次回、愛称「リサイクラー」の由縁に迫る！

「リサイクラー」開発秘話をじっくりと聞いたところで、はたと気づきました。

なんで松下の生ごみ処理機は「リサイクラー」という名前なんだろう。生ごみの減量が目的だったはず…と言うわけで、次回は「リサイクル」に向けた取り組みを探ります！ その取り組みのために自費まで切って研究所を作った名物営業マンが登場しますよ！



「リサイクラー」普及のために取り組まれていた芦田吉雄さん。



現在、商品企画をされている澤綾子さん。お話しているときの笑顔がステキでした。



「リサイクラー」は集まっていた方みんなに、愛されているんですね。

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

第4章 処理物の行方は…??



生ごみ減量を目指して、多くの人の手によって生まれた「リサイクラー」。生ごみ処理機は数々あれど、ここまでリサイクルを意識した名前なのは、赤星、他に知りません。最初のきっかけは生ごみ減量だけがテーマだったのに、どうして？

名物営業マン、実験用農場を作る！

「『リサイクラー』っていうのはね、社員の投票で決めたんですよ。発売前に乾燥式として完成しつつあった頃、他社がバイオ式を検討していて、それは処理物が再利用できるっていう噂を聞いて、うちも何かできないかなあ、と考え始めたんです。でもまったくノウハウもなくて、それは苦労しましたよ」と、吉田さん。

どうして苦労をされたんですかと聞くと、当時吉田さんと一緒に「リサイクラー」の推進課長をされていた、営業の井下さんを紹介してくださいました。井下さんは、リサイクラーの処理物を使って作物を育てることができるかどうかを実験するために、ハウス付き農場をなんとご自分で設計して作ってしまったんだそうです。なんてパワフルなんでしょう！ すごくですねえ、と私が水を向けると、

「だってね、通常の新品には販促についていろいろ考えてくれる部署があったけど、この商品だけは、そういうところがなかったんですよ。しかも、新規事業だったから予算もなかなか回ってこなくてね。自分で作るしかなかったんです。お客さんに自信をもたせようと思えば、どうしても事実に基づいた、説得力のある説明が必要でしたから。お客さんが家庭で生ごみを処理した後、簡単に再利用する方法をつきとめてたくてね」。

と、こともなげにおっしゃる井下さん。そう、生ごみ処理機が「リサイクラー」となったのは、やっぱり家庭で簡単に減量し、再利用できる、というポリシーに根付いていたんです！ そこで井下さんは、植物の肥料に利用する方法をまず研究されていたんです。会社の敷地内に作った約1反（300坪）の農場で、井下さんは処理物を使っているんなパターンで実験を繰り返されました。たとえば、乾燥処理物を発酵させて堆肥にしたものを混ぜた土と、化学肥料を混ぜた土と、どちらが発芽率や成長率がいいかについて。

「小松菜、ほうれん草、トマト、いろいろ試しました。最初は化学肥料の方が発芽率もよくて、成長も早いんですけど、後になると乾燥処理物の方が良く成長するんですね。乾燥処理物で育てたトマトなんか、化学肥料で育てたものよりも収穫量も多いし、糖度が高くおいしいんです。小松菜やほうれん草の収穫後の日もちも良かったんですよ」。

やった！ 乾燥処理物は立派な肥料になるぞ！と、1号機の「リサイクラー」発売とともに、この方法をお客さまにおすすめすることになりました。ところが、井下さんはここで一つの壁にぶち当たります。

「当時は処理物に水を混ぜて発酵させ、堆肥にする方法を研究していたんですが、その方法だと少し油断すると虫がわいてしまう、という声がお客さまからあがってきたんです」。

ガーン！ やっと乾燥処理物の良さがわかってきたところなのに！ どうする！？



営業をされていた井下正さん。ご自分でも「リサイクラー」を使って、実験をこめてお客さまにおすすめされたそうです。



野菜や四季の花などで、実験されたんだそうです。発芽の状態を見るにも時期的なタイミングがあるから大変だったそうです。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

（第4章のつぎ）



夢にまで見た処理物の再利用方法とは？
この寤地を抜け出せたのは、処理物の利用法について考え続けていた吉田さんのヒラメキがきっかけでした。

「処理物がうまく二次使用できれば、生ごみは減るわ、肥料や飼料として有効活用できるわで、環境のためにこんなに素晴らしいことはないでしょう？ これから日本が目指すべき循環型社会をつくることは、生ごみリサイクルの輪をつくるのがカギになると、強く思っていたんです。だから、何となくでも、うまい再利用方法を見つけたかった」と、吉田さん。心意気が伝わってきます。目が輝いているんです！

「そして毎日毎日、寝ても覚めても処理物の再利用方法を考えていたある日、私ね、夢を見ました。その夢で「乾燥式の処理物は、水を混ぜなくても、そのまま肥料として使える」と言われてね。これはいける！と思って、さっそく井下さんに、そのまま使っていい肥料になる方法を調べてほしい、とお願いしたんです」

おお、それは！ 去年、たい肥作りの本を書いた私、今ならよくわかります！ せっかく乾燥させた生ごみ処理物を、あとで水を加えてから土にまぜるより、乾燥させたものを直接土に混ぜた方が失敗が少なく、いい肥料になるんです。生ごみをたい肥にするときの一番の苦労は、水分のコントロール、ということは最近わかってきたことですが、これを吉田さんと井下さん、10年も前から始めていたんですねえ。そのきっかけが、吉田さんの夢…。生ごみの神様のお告げだったのでしょうか？！

お告げ通りに井下さんが実験してみると、乾燥処理物をそのまま使うことで十分な成果が得られたそうです。しかも虫がわく心配もなし。これでいこう！と、その後の研究が一気に加速します。



再利用方法を井上さんといっしょに模索していた吉田さん。そのヒラメキとは？



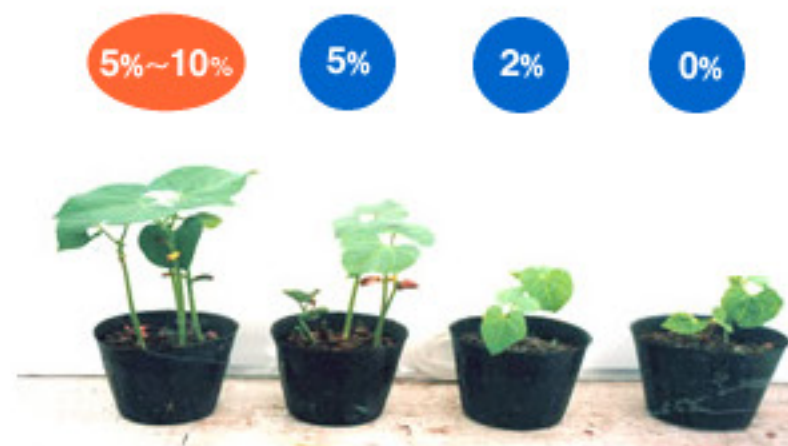
論より証拠！ 野菜の出来が違う！

「まず調べたのは、土に対してどれくらいの処理物を入れたら一番効果があるかという、混合率についてです。混合率を変えて実験してみると、5～10%が一番いいとわかりました。これ以上入れると、かえって農作物の初期の成長がおかしくなるんです」と井下さん。なるほど、栄養がありすぎるのもよくないし、少ないのもよくない、ということですね。実際、丹精込めて作られた小松菜も里芋も、5%の混合率のものが一番いきいき、元気です。

「それから、どこに処理物を入れたら一番効果的か、ということについても実験しました。土全体に混ぜるのがいいのか、根の部分に集中的に入れるのがいいのか。土の上の方に混ぜるのか、底に混ぜるのか。これについては、1カ月後には、全体に混ぜるのが一番元気が良かったんですが、1カ月半くらい経つと同じになりました。どこに入れても効果はあるということですね」。

こんなふうに、実験によって乾燥処理物は肥料として十分に有効に使えるということが歴然とわかったわけですから、これはどんな理論よりも説得力アリ！ 井下さんの行動力が実を結んだんですね！

さらに、肥料だけでなく、飼料としても使えることも判明。最初は鯉のエサにならないかと、川にまいたこともあったんですけど。その後、さらに研究が進んで、第1章でもご紹介したような、豚さんのエサに利用された例にもつながってるんですね～。今まで廃棄していたものが豚や鶏の飼料原料になると、捨てるのにかかる費用もエサ代も浮くし、これぞリサイクルの真骨頂ですね！



エンドウマメでの実験。背丈だけでなく色合いも違います！



既存の「営業」という枠にとらわれない井下さんの試みは、「すごい！」の一言。「リサイクラー」への愛情を感じますね！



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

＜ 第4章のつづき ＞

はばたけ「リサイクラー」！
エコロへの願い

もう、ここまできたら恐いものはなし！ 井下さんや吉田さんをはじめとする営業の皆さんが、できた処理物をかばんに詰め込み、自治体へ、企業へ、販売店へ、いざ生ごみリサイクルの輪を広げん！と、はばたいていかれたのでした。それからいろんな素晴らしい生ごみリサイクルの輪がどんどん誕生していったんですね～。

「商品を売るために、処理物の再利用方法まで松下が研究すべきか？」という声も、実際はありました。開発のきっかけは生ごみを減らして、生活を快適に、というのが目的でしたから。でも、乾燥処理物は使い方によっては、本当に資源になるんですよ。それを再利用できる方法も知ってこそ、自信をもっておすすめできるようになったんです。おすすめする限りは、みなさんが手軽にエコロジーできるものでなくてはね」と、吉田さん。

「リサイクラー」の開発といい、処理物の再利用についての研究といい、どこまでも生活者の立場で理想を追求するその姿勢には、赤星、感動を覚えました。「リサイクラー」という愛称は、家庭で手軽に処理物を再利用できる生ごみ処理機を作りたい、という開発に携わった人たちの思いが込められていたんですね～。特に生ごみ処理機という、まったくこの世になかったものを生み出すのは、ホントにホントに大変なことだ、というのが今回よくわかりました。その困難は、皆さんのチームワークと情熱があったから乗り切れたのでしょう。その情熱の奥にあるものが、松下が「エコロ」にかける願いだったんですね！

どんな思いが松下を動かすのか？

この情熱はいったいどこからきたんでしょう？ 「循環型社会の実現」というような堅苦しい言葉で考えていると、情熱は持続しにくいような気がします。それよりも、「くさ～い生ごみ、何とかしたい！」という素朴で強い思いが情熱を持続させたのでは？ 何か、開発者を突き動かしたものがあがる気がするんです！ 一消費者という視点にこだわる松下スピリットは、これからどういう風に進んでいくのでしょうか。すっかりそのスピリットに感銘を受けた赤星、そんなところにもまで興味をもちました。

そこで、いよいよ最終回では、吉田さんに「リサイクラー」の産みの親（当時の技術部長）、松下ホームアプライアンス社・林社長を紹介してもらい、突撃インタビューさせてもらえることになりました！



吉田さんは、事業部敷地内の畑で乾燥処理物を使って野菜を栽培中。「栄養も大切ですけどね、実は愛情ですな」と、休日でも水やりをされるそうです。

戻る

[トップ](#)
[プロローグ](#)
[第1章](#)
[第2章](#)
[第3章](#)
[第4章](#)
[第5章](#)

次へ

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

第5章 松下のエコロは 熱かった！

20年前、家庭用の生ごみ処理機というものを日本で初めて誕生させた松下。その当時、世の中はまだエコに対する関心は薄かったはず。『リサイクラー』のような商品を開発しようとするには、なにか強い思い入れがないとできなかったのではないかしら？ そのへんのところを聞いてみたい！と、『リサイクラー』の生みの親、松下ホームアプライアンス社の林社長にお話を聞きにいきました。ちょっぴり緊張しながら、ね。林社長は、『リサイクラー』発売直前、林田さんたち開発者に、あの「全員で取り組み！」の号令を出した人ですよ！

きっかけは、「世界のごみをなくしたい！」
お会いしてみると、林社長はとてパワフルでエネルギッシュな方でした。やはり『リサイクラー』の開発を引っ張ってこられた方だけありますね。

さっそく『リサイクラー』に込められたエコロへの思いを尋ねてみました。

「『リサイクラー』開発当初の20年ほど前は、まだエコロジーという考え方はなかったですよ」と意外なお答え。ええっ、エコロジーを考えなくて『リサイクラー』を作ったんですか？

「実は『リサイクラー』は、掃除機事業部で開発したんです」。

ええっ、掃除機事業部？？ エコ部門じゃなくて？ 私の目は丸くなるばかり。驚きですよ！
「掃除機事業部で掲げている“世界中のごみをなくす”という事業理念から、ごみの一つである台所の生ごみもなくしましょう、ということがきっかけです。へえ~~~~と、思わず私、【20へえ】くらいポイント上げちゃいました。

「掃除機事業部だからって掃除機だけを考えるのではなくて、“世界中のありとあらゆるごみをなくそう”という壮大な思いがあったんだな」とにこやかに語る林社長。

ふむ〜、とにかくごみをなくして、生活を快適に！ということだったんですね〜。

「これはね、当時の社長自身の経験から来てるんです。『生ごみ、臭くていややなあ〜』って、単身赴任のときに感じたらしいです。で、社長プロジェクトに認定するほど力を入れたんですね」。

ほお~~~~。やっぱり生活に根付いた体験があったからこそ、開発に力を入れたんですね。これこそ消費者の視点です！



松下ホームアプライアンス社の林義孝社長。当時は『リサイクラー』開発の技術部長として、開発者を引っ張ってこられた方です。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第5章のつぎ)

苦勞も多かったけど・・・

でも、ここまで開発者の方に話を聞いてきてわかったんですが、家庭で使うことにすごくこだわりがあった分、たくさんのお苦勞がありましたよね？

「そうですね。『リサイクラー』の開発は、言ってみれば、生ごみがあって当たり前の生活から、生ごみがない生活へ、という新しい試みでしたからね。生ごみがない生活…。

「においがあるとはいけない、危険であるとはいけない、と試行錯誤しましたね。それらをどこまで改良したらいいのか、クリアすべき基準すらない。時間も予算も限られている。もし開発が発売日に間に合わなかったってええやんか、と思ったら、『リサイクラー』は生まれなかったかもしれません。でも諦めなかった。それはまさに“自分との戦い”だったなあ。

自分との戦い…。私たちが家庭で、安心・安全・手軽に使えるリサイクラーを生産させるために、開発部隊一人ひとりが戦ってくれたんです！

戦ったのは開発部隊だけではありません。リサイクラーで処理した生ごみを、リサイクルの輪に乗せるための戦いもありました。実際に再利用されている事例を聞いて、やっぱり「リサイクラー」は時代にぴったりマッチした商品なんだと赤星は思いました。

「でも私はね、今の形がゴールだ、とは思ってないんですよ。」

え?! 「リサイクラー」は、また変身するんですか??

「リサイクラー」にゴールはない?!

「これから世の中が、どう変わるかはわかりませんが、開発当初は生ごみ減量が目的だったでしょう。今は循環型社会を目指す世の中になったから、これからは『リサイクル』でしょうなあ。だから、再利用の事例が増えることは、いいことだと思いますね。」

じゃあ、それがゴールでないというのは、どういうことですか？

「今の生活が変われば、おなじみの掃除機や洗濯機だって、自ずと変わっていくんですよ。だから『リサイクラー』だって、今の形から変わっていく必要があるかもしれないですからね。」

なるほど、社会というものは常に動いている、だからすべての商品にゴールはない、ということでしょうか。

「そういう意味では、『リサイクラー』みたいな、今まで存在していなかった新規商品を開発するってことは、既存の商品をリニューアルするのとは、また違った苦勞がありますよ。」

ここ数年での新規商品といえば、IHクッキングヒーターや食器洗い乾燥機が代表格だそうですが、40年をかけておなじみになってきたIHも、発売当初はなかなか受け入れてもらえなかったそうです。

「今までの文化や習慣の壁を破り、新しい生活のコンセプトを作るのが、いかに難しいか。世界のどこにもない商品を手がけていく不安が、どれだけ大きいか。食器洗い機や、乾燥機は欧米に先に登場していたから、いずれ日本でも浸透する時代がくるだろうという確信をもって取り組めただけで、まったく新しい商品の場合は特に、それに取り組む勇気、熱意と執念は大変なものです。しかし、それをやっていくのが私たちの使命だ、と強く思っているんです。本当に便利で、生活がより良くなるのであれば、文化や習慣の枠を越えて必ずわかってもらえると思っています。当社の今までのトップ全員がそういう思いを持っていたから、誰一人、生ごみ処理機への取り組みをやめよう、とは言わなかったんですね。」

消費者としての視点を持ち続ける松下スピリットがここにありました。

「私たちの使命は、“生活を作る”ってことですから。」

ううむ、名ゼリフです！
生活を見つめ、そこからひらめき、新しい生活を作る。開発に携わった方たちが、エコロにこだわったわけが見えました！ 松下の開発にかける思いはこんなに熱かったんですね～！！

赤星、しばし感動…。



林社長の「自分との戦い」という言葉はご本人が乗り越えられたからこそその重みがありました！



こうして生産される「リサイクラー」。この先、形は変わっても、“家庭で使って安心・安全”は変わらないですね。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

(第5章のつぎ)

● 松下のエコロに、出会いました

● 今回の取材は、私は本当に楽しませてもらいました。エコロジストの端くれとして、私も生ごみ処理にはちよっとうるさい方です。昔は生ごみ処理にわざわざ電気を使うなんて！と目くじら立てたときもありました。土の中の微生物を使えよ、微生物を！なんて思ったりしてね。

● ところが、去年、生ごみたい肥作りの本を作ったおかげで、私は生ごみ処理を科学的に考えることが出来ました。その上で、乾燥式の良さを私は認めることができました。

● そして、処理物が再利用されている話を聞き、さらに乾燥式の良さがわかりました。乾燥式で処理したものは、保存がきく。そのまま土に埋めて肥料として使うことができる。家畜の餌にもなる。と、いろいろな使い方ができるんです。

● 家庭で処理したものをリサイクルの輪に乗せず、自治体の生ごみ処理に出して焼却してしまったらこんなにもったいないことはありません。せっかく処理したのなら、それをリサイクルしたいですよね。

● リサイクルの輪を作って、実際に活用している事例を聞いて、私はまた嬉しくなりました。私のホームページでも、「リサイクラー」の処理物を使ってリサイクルをしている方からの投稿もありました。

● 「リサイクラー」という名前が象徴しているように、リサイクル、広がっています！

● 取材を終えて、「ありがとうございました」とお礼を言う私に、「それにね」ちょっといたずらっぽく微笑む林社長。

● 「全く新しい商品は、なんといっても関わっていてもしるいですよ。既存のものはどうしても、今あるものとの比較論になっちゃうからね」。

● 林社長の、経営者としてだけでなく、技術者としての顔が垣間見えたような気がしました。そんな社長だからこそ、開発者も“自分との戦い”をしながら、ついてこられたんでしょうね！

● 胸がいっぱいになった赤星は、こうして松下電器を後にしました。

■おわり

> 「リサイクラー」製品情報はこちら。

※本コンテンツ内に登場する組織名称および人物の役職は、2003年8月時点のものです。



今回は本当に楽しめました。貴重なお話を聞かせてくださった方々、ありがとうございました！

いかがでしたか？あなたの評価はこちらから！<トップへ>